



五百旗頭真の

大災害の時代

第31回 「自衛隊の任務」

覚悟が生む瞬時の判断

防衛大学校長に就任した時、私は当時の防衛庁長官から辞令を受け、型通りの直筆文を讀んだ。その中に「ここに臨んで、わが身を顧みず」という例の一句があった。制服の自衛官だけでなく、背広の防衛庁職員もこれを誓うのだと知った。

それは修辭ないし建前なのか、本気なのか。森勉陸上幕僚長が防大に來校し、後輩たちへの講話の中で、「死ぬことは何でもない。問題はいかに任務を達成するか」と言い切るのに感銘を受けた。任務達成のため、わが身を顧みないタイプの志の強い自衛隊員は上から下まで、かなり多いと私は感じている。

たゞ、それは無制約ではない。大災害に際して部下はかわいさず、死なせない。部下の不届の取返を期待しながらも指揮官が限度を見きわめ、きりきりとのどろどろの突進を禁じ、命令によって部下と組織を守る。組織の合理性は戦力の維持を要求する。不眠不休で倒れるまで働くのを英雄視するのではなく、戦力回復の合理的な措置を講ずる。「自衛の安全なる者のみが人を救いたい」

「顧みず」の相克

この大災害の中で自衛官が最も苦しんだのは「自衛を顧みず」の部分ではなかった。それについては賞格の職務であり、現に人間の限界を超えると思われるほどの救助活動が続けた者も少なくなかった。問題は「自衛を顧みず」が「家族を顧みず」を包含することであった。妻子を救い出したい、せめて家族の安全だけでも確かめたい、その思いに響いて彼らは組織的な救助活動に没頭せねばならなかった。わが家族を見捨てつ

つ他者を救いに出かける不条理に苦しんだといってもよい。救助活動の中で小さな手を助け出した時、あるいは小さな子の遺体を抱きかかえた時、とりわけわが子と同じ年の子の手であれば、涙があふれ出るのを止めようもない。

被災地の東北6県は陸上自衛隊東北方面総監部（仙台）の下にある第6師団（山形県東根）と第9師団（青森の警備区域）と第2師団（宮城県の宮城県仙台市）にあり、航空自衛隊の松島基地とともに、最も被災地に近接した、というよりは津波の侵入を受けられた被災地であった。隊員たちの自宅も海辺に近い場合には容赦なく津波に襲われた。彼らは公的な任務と家族の安全の相克をどう切りさばっていたのか。

体現された訓示

非常事態に直面した時、当然ながら、組織のトップがどう対応を方向づけるかが決定的な重みである。多賀城連隊の園友副連隊長も、その上司の久納雄二第6師団長も、東北にはなかったが、東北の人々の深い郷土愛を理解していた。2人の指揮官はともに「郷土部隊」としての誇りに語りかけた。誠意その名にふさわしい情愛のこもった、ねばり強い東北部隊の働きぶりであった。



自衛隊のヘリで搬送される症状の重い被災者
—仙台市若林区の陸上自衛隊霞目飛行場で2011年3月13日、梅村直承撮影

かかっているのだ。行くか、逃亡兵になっても。心を引き裂かれ、立ちすくむ夫に再度妻から電話がかかった。「大丈夫だから、他の人を助けてあげて」。夫の声であった。わねに返った隊員は迷いを捨てて活動に没頭した。「妻と息子におれをいいたい。本当にありがとう」（編野隆浩「ドキュメント 自衛隊と東日本大震災」ポプラ社）

かかっているのだ。行くか、逃亡兵になっても。心を引き裂かれ、立ちすくむ夫に再度妻から電話がかかった。「大丈夫だから、他の人を助けてあげて」。夫の声であった。わねに返った隊員は迷いを捨てて活動に没頭した。「妻と息子におれをいいたい。本当にありがとう」（編野隆浩「ドキュメント 自衛隊と東日本大震災」ポプラ社）

かかっているのだ。行くか、逃亡兵になっても。心を引き裂かれ、立ちすくむ夫に再度妻から電話がかかった。「大丈夫だから、他の人を助けてあげて」。夫の声であった。わねに返った隊員は迷いを捨てて活動に没頭した。「妻と息子におれをいいたい。本当にありがとう」（編野隆浩「ドキュメント 自衛隊と東日本大震災」ポプラ社）

「阪神」の反省から

3月11日午後2時46分その瞬間、文政の防衛省幹部は、市ヶ谷A棟1階の事務次官室で会議中であった。震度5以上のが来れば非常事態を宣告するところ定められている。大揺れが来る、幹部会がたちまち中止し、テレビのスイッチを入れた。宮城東沖を震源とするマグニチュード(M)8.4の大地震であることが報じられた。

重大事態を直感した火箱芳文陸上幕僚長は階段を駆けおり、4階の陸幕長室に飛び込んだ。これは戦だ、速やかに戦力を集中するにせよとすべきかと思索しつつ、君塚総監に電話を入れた。「おられました。室内はがたがたです。建てたばかりの隣の庁舎のつぎ目付近からエレベーターが映りません。停電でエレベーターが動かなくなりました。二重扉を待たなくてはならない、直ぐに出動せよ。全国から部隊を増援せよ」と伝えた。続いて西部方面総監部（熊本）に電話し、「第4師団（福岡県春日）と第5師団（同県小郡）はまず出動せよ。第8師団（熊本）と第15旅団（那覇）の戦隊にもう動かしはならぬ。いざ大目もへんは統合幕僚長から正式命令が来るだろうが、それ

を待つことなく準備にかかれ」と指示した。熊本師団と南西旅団の戦隊部隊派遣を禁じたのは、東シナ海の波高状況に備え置かれたためである。陸幕長は、全国五つの総監部すべてに電話し、同様の指示を与えた（日本防衛学会「自衛隊災害派遣の美態と課題」、火箱「東日本大震災への対応と我が国の防衛」日本国防協会での講演）

このような即時の指示を陸幕長が行ったのは、災害用の事前計画が自衛隊内にあったからであろう。その本人に尋ねたところ、答えはノーであった。宮城

県沖の普通の地震・津波に対する計画と訓練は東北総監内にあったが、このような巨大地震に対する全国動員プランはなかったという。では陸幕長単独で即時に判断し全国に指示を出したのか。そうだとすると、私は驚いた。なぜそんな離れ業ができるのか。同時に、これは陸幕長の独断専行ではないのか。陸幕長自身、そのさきうかがいと感じつつ、この重大事態にあってはあえてそうすべきだと確信して行ったという。

その日午後8時半に省対策会議が行われ、陸幕長の機敏さにもかかわらず、即時の対応は了承され公式化された。重直人首相が北澤俊美防衛相に対し、自衛隊に最大限の活動を行うよう求めたことが会議で伝えられ、すでにその手配を済ませたと陸幕長が答えていることが収まったのである。いよいよ陸幕長の独断専行の政府による追認であった。

東日本大震災に対する全国派遣計画はなかったが、このような大災害に対する考え方がなかったわけではない。首都直下地震に際して、自衛隊の最大出動限度である1万13万人の派遣計画が存在した。それは自衛隊総員の約半数を派遣するかなり無理な計画であるが、その際にもう種の動かしはならぬ、いざカテローがある。一は、東京、大阪、札幌などの重要地点を守る部隊、もう一つが国防上の前線部隊である。そうした自衛隊幹部に共有されている観点に立ちつつ、陸幕長があの事態に即座に適用する判断を下して指示したたのである。火箱陸幕長の明示した折木良一統合幕僚長の「N（ナビゲーション）」。それは最初の遅れた阪神・淡路大震災時の対応への自衛隊の深い反省に根拠した行動であったといえよう。

（肩書は当時）